武蔵国多摩郡の寺院で供養されている被葬者の出身地

- 「過去帳」分析システムを用いた史料検討 -

川口 洋　　上原邦彦　　日置慎治
帝塚山大学経営情報学部

本稿では，「過去帳」分析システムを構築して，寺院「過去帳」に供養されている被葬者の出身地について検討する．「過去帳」分析システムは，「過去帳」データベース，「過去帳」分析プログラム，および検索利用マニュアルから構成されている．本システムには，約3万1千人の被葬者が登録されており，51項目の死亡に関わる人口学的指標を利用者側コンピュータに表示することができる．武蔵国多摩郡に立地する10ヵ寺の寺院「過去帳」を分析した結果，17世紀初頭から20世紀初頭まで被葬者総数の数%を占める他所出身者の出身地は，東北，関東，東海，北陸，近畿，中国，四国，九州にわたっていた．

Birth places of the deaths who died in the suburbs of Tokyo metropolitan area, with the data analysis system for the Japanese Buddhist temple death registers

Hiroshi Kawaguchi　　Kunihiko Uehara　　Shinnji Hioki
Faculty of Business Administration
Tezukayama University

We have constructed a database system for analyzing the Japanese Buddhist temple death register which is called *Kako-Cho* (KC). The system is composed of the database of the KC data, programs for outputting the statistics of mortality and the manual for users. The URL of this system is http://kawaguchi.tezukayama-u.ac.jp. We have stored up approximately 31 thousand deaths in 12 Buddhist temples. We can provide 51 kind of demographic statistics concerning with mortality. With this system, we have investigated the birthplaces of the deaths in *Tama* County, *Musashi* Province. We find some peasants who came from all over Japan, died in *Tama* County after the beginning of the 17th Century.

1．はじめに

武蔵国多摩郡では，牛痘種痘法が 1850 年初頭に導入され，1860 年代初頭には平野部に普及したと推定される[1]．筆者は，牛痘種痘法の普及が急速に進んだ多摩郡をはじめとする地域では，天然痘による子供の死亡数が 1860 年代から激減したという作業仮説を提案した[2]．本プロジェクトでは，この作業仮説を検証するため，多摩郡における子供の死亡数を寺院「過去帳」から復原することを目指している．

従来の研究によれば，普通死亡率の低下と普通出生率の低下を両側面とするわが国における人口転換は，1920 年代から本格化したと考えられている[3]．すなわち，人口転換の開始時期は第一次世界大戦後と推定されてきた．推論の根拠となったのは，明治時代中期から次第に整備されていった人口統計であった．先に述べた仮説を検証することができれば，わが国の人口転換に関する定説が覆る可能性がある．

筆者は，上記の作業仮説を検証するために，近代移行期における死亡者が記録されている寺院「過去帳」の内容を分析する「過去帳」分析システムを構築して，寺院「過去帳」に記録されている被葬者に関する理解を深めるために史料吟味を続けている[4]，[5]．これまでに，天然痘に罹患する可能性の稀な流産・死産児にも戒名を付けて供養する習慣が定着した時期が 1880 年代であり[6]，多摩郡の在所から遠く離れた他所で死亡した者も檀那寺の寺院「過去帳」に記録されていることを確認した[7]．

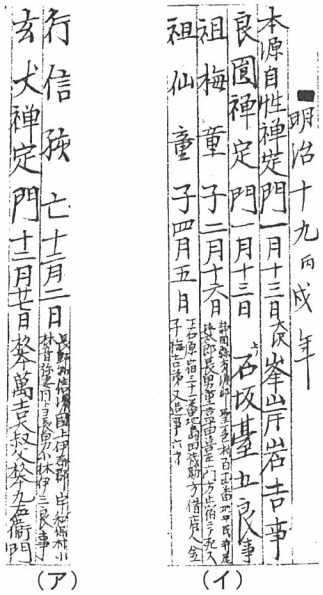
「過去帳」に関する資料批判は，緒についた段階にとどまっており，史料的性格の吟味が必要である点が繰り返し強調されている[8]．他方，1990 年代から本格化した行路病死人，行倒人に関わる一連の研究により，他所者が村で発病・死亡した場合の看病・埋葬を含む対処法の実態解明が進んでいる[9]，[10]，[11]，[12]，[13]．

牛痘種痘法導入期の寺院所在地における子供の死亡数を復原する場合，在所で死亡した者と在所から離れた他所で死亡した者を区別する必要がある．本稿では，他所死亡者について検討した前稿に続き，多摩郡の寺院「過去帳」に記録されている被葬者の出身地について検討する．

2．寺院「過去帳」の記録内容

寺院「過去帳」は，近代移行期の人口現象を復原するうえで，「宗門改帳」と並ぶ基礎的史料である．「宗門改帳」の作成は，明治 3（1870）年までに終了するのに対して，寺院「過去帳」は，幕末維新期を挟んで死亡者を記録し続けている点でことに貴重である．

筆者が調査した 12 ヵ寺の寺院「過去帳」には，被葬者を①死亡日順に記録した「日繰り」，②死亡年月日順に記録した「年繰り」，③家族（世帯）ごとに記録した史料の 3 種類が確認できる．次に示す図 1 は，②の「年繰り」方式による「過去帳」の書式例である．



（ア）　（イ）

図 1　武蔵国多摩郡下石原宿 B 寺「過去帳」

寺院「過去帳」には，被葬者の戒名，俗名（喪主との続き柄），および死亡年月日が記録されている．なかには，被葬者の死亡年齢，居住地の小字名，死因，死亡地，出身地，生年月日が書かれている寺院「過去帳」も確認できる．

被葬者の出身地に関わる記録から，①寺院周辺を通りかかった他所出身者が死亡した場合，②寺院周辺に居住していた他所出身者が死亡した場合，③寺院から離れた場所で死亡した他所出身者を多摩郡の寺院で供養した場合などが想定できる．図 1（イ）の祖梅童子は①の事例とみられる．しかし，図 1（ア）の行信孩亡が B 寺「過去帳」に供養された事情については，①～③のいずれであるのか特定することは困難である．本稿では，ひとまず寺院「過去帳」に出身地の記録されている被葬者を他所出身被葬者と一括して呼ぶことにしたい．

3．システム構築の意義

近年著しい展開をみせている歴史人口学では，「宗門改帳」の分析事例は急増している．しかし，寺院「過去帳」を用いた研究は 1980 年代以降，逆に減少している．その要因として，①史料整理に膨大な作業量が必要である，②人権問題などのために史料収集が至難である，③史料的性格が未解明であるといった点が指摘できる．

本研究で構築中の「過去帳」分析システムは，①に関して史料読解から人口学的指標の算出に至る研究過程の短縮を図るだけでなく，寺院「過去帳」から死亡統計を求める研究過程の再現性を保障するとともに，文字データとして寺院「過去帳」の保存を図り，研究者間における史料と分析方法の共有を目指している．

②についても，本システムに史料を蓄積する作業は，関係各寺院の理解のもとに，今後とも順調に進展すると思われる．

③に関して，寺院「過去帳」の記録内容を分析するには，史料の作成年代や作成者などを特定する書誌学的検討，寺檀関係の解明，および「宗門改帳」や墓碑銘などの関連資料との比較が不可欠である．史料的性格を十分吟味せずに人口統計学の手法を寺院「過去帳」に適用することは，絶対に避けるべきである．

「宗門改帳」とは異なり，寺院「過去帳」から檀家の総人口や性別・年齢別人口といった人口分析に不可欠な at risk population を求めることはできない．そのため寺院「過去帳」を用いて死亡数の時系列的変化などを追跡するには，檀家数や檀家の分布，戒名をつけて葬られた被葬者の性格などを慎重に吟味する必要がある．

本稿では，寺院所在地における子供の死亡数の変化を復原するための基礎的作業として，武蔵国多摩郡下 10 ヵ寺の史料を用いて，在所から遠く離れた多摩郡下の寺院「過去帳」に供養されている被葬者の実像にせまりたい．具体的には，他所出身被葬者の出身地，戒名，死亡年齢，死亡月などについて検討する．

4．「過去帳」分析システムの概要

4．1．開発環境と構成

「過去帳」分析システムを含む「江戸時代における人口分析システム(DANJURO ver.4.0)」は，HP PROLIANT ML310 を web サーバ機，HP PROLIANT ML330 をデータベース機として構築されている．WINDOWS 2000 と 2003 を OS，ORACLE Internet Application Server 9.0.2 を Web Server，ORACLE Database 9.2.0 を DBMS として開発，運用されている．

本システムを利用するには，利用者側コンピュータに Microsoft Internet Explore 6.0, Netscape Navigator 7.0 などの Web ブラウザーと Microsoft Excel 2003 を準備する必要がある．

DANJURO ver.4.0 の URL は次に示される．
http://kawaguchi.tezukayama-u.ac.jp

DANJURO ver.4.0 は，「宗門改帳」分析システム，「過去帳」分析システム，「幕末維新期人口史料」分析システム，古文書文字の認識，研究費・研究成果・受賞歴，および関連サイトへのリンクから構成されている．

「過去帳」分析システムは，「過去帳」データベース，「過去帳」分析プログラム，および検索利用マニュアルから構成されている．本システムでは，二重の認証画面を設け，利用登録をした研究者以外の利用を制限している．

4. 2. 「過去帳」データベース

「過去帳」データベースには，武蔵国多摩郡，美作国真庭郡，および備後国御調郡に立地する12ヵ寺の約3万1千人にのぼる被葬者が登録されている（表1）．次に示すデータ項目のうち，下線を引いたものが数値データ，それ以外は文字データである．

寺院「過去帳」テーブル…寺院所在地，寺院名，宗教・宗派，史料名，死亡年（西暦），死亡年月日（旧暦），死亡年月日（新暦），戒名，性別，居住地，俗名，死亡年齢，出生年（西暦），生年月日（旧暦），生年月日（新暦），死因，死亡地，出身地．

「過去帳」データベースは，検索条件入力画面，検索結果のブラウジング画面，被葬者の詳細情報表示画面，download 項目の選択画面，および download の実行画面から構成されている．

4. 3. 「過去帳」分析プログラム

「過去帳」分析プログラムを用いて，以下 51 項目の人口学的指標を算出して，利用者側コンピュータにグラフ表示することができる．

①被葬者数に関する指標…男女別被葬者数，男性被葬者数，女性被葬者数，被葬者の性比，日別男女別被葬者数，日別男女別死亡指数，日別被葬者の性比死亡地が記録されている被葬者数，死亡地が記録されている被葬者の構成比，出身地が記録されている被葬者数，出身地が記録されている被葬者の構成比，居住地が記録されている被葬者数，居住地が記録されている被葬者の構成比．

②年齢別死亡構造に関する指標…戒名の位号の出現頻度，戒名の位号の構成比，死亡年齢と戒名の位号（全体），死亡年齢と戒名の位号（子供），死亡年齢と戒名の位号（成人），死亡年齢と戒名の位号（出家など），戒名の位号別被葬者数（子供），戒名の位号別被葬者数（成人），戒名の位号別被葬者数（出家など），年齢階層別被葬者数，子供の被葬者数，成人の被葬者数，年齢階層別被葬者の性比．

③死亡の季節性に関する指標…月別男女別被葬者数，月別男女別死亡指数，月別被葬者の性比，月別年齢階層別被葬者数，月別年齢階層別死亡指数，月別年齢階層別被葬者の性比，季節別男女別被葬者数，季節別男女別死亡指数，季節別被葬者の性比，季節別年齢階層別被葬者数，季節別年齢階層別死亡指数，季節別年齢階層別被葬者の性比．

④死因などに関する指標…死因が記録されている被葬者数，死因が記録されている被葬者数の構成比，男女別流産・死産児数，戒名の位号別流産・死産児数，男女別天然痘死亡数，天然痘死亡者の死亡年齢，戒名の位号別天然痘死亡数，出生年が記録されている被葬者数，出生年が記録されている被葬者の構成比，

表1　「過去帳」データベースに登録されている被葬者

寺院の所在地	現在地	寺院名	死亡年	被葬者数（人）
武蔵国多摩郡川崎村	東京都羽村市	A寺	1736-1910	2,608
武蔵国多摩郡下石原宿	東京都調布市	B寺	1579-1910	1,631
武蔵国多摩郡五日市村	東京都あきる野市	C寺	1278-1910	2,542
武蔵国多摩郡千ヵ瀬村	東京都青梅市	D寺	1786-1910	2,207
武蔵国多摩郡打越村	東京都八王子市	E寺	1494-1910	2,045
武蔵国多摩郡羽村	東京都羽村市	F寺	1646-1910	2,413
武蔵国多摩郡日野宿	東京都日野市	G寺	730-1910	4,939
武蔵国多摩郡羽村	東京都羽村市	H寺	1683-1910	2,906
武蔵国多摩郡福島村	東京都昭島市	I寺	1364-1910	2,491
美作国真庭郡新庄村	岡山県真庭郡新庄村	J寺	1653-1910	3,862
武蔵国多摩郡横沢村	東京都あきる野市	K寺	1550-1804, 1889-1910	2,601
備後国御調郡三庄村	広島県因島市	L寺	1829-1863	709
合　計				30,954

表2　武蔵国多摩郡下石原宿B寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	285人(男性134人、女性151人)	384人(男性193人、女性188人、性別不明3人)	469人(男性243人、女性225人、性別不明1人)
他所出身者	江戸(信女1人) 甲斐国(禅定門1人)	相模国(禅定門1人) 甲斐国八代郡(童女1人、禅定尼1人)	江戸／東京(信士1人、居士1人、童子1人、信女3人、禅定尼1人、童女1人) 静岡県有渡郡(童子1人) 静岡県富士郡(信士1人) 茨城県猿島郡(孩女1人) 神奈川県三浦郡(禅定門1人) 埼玉県新座郡(童子1人) 信濃国上伊那郡(孩亡1人) 伊豆国高田郡(禅定門1人) 調布町(信士1人)

表3　武蔵国多摩郡福嶋村I寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	483人(男性265人、女性218人)	468人(男性227人、女性241人)	666人(男性338人、女性325人、性別不明5人)
他所出身者	越後国(禅尼1人) 郷地宮崎(童子1人)	相模国(信士1人)	遠江国(信女1人) 出羽国庄内(大姉1人)

表4　武蔵国多摩郡日野宿G寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1610-1659	1660-1709	1710-1759
被葬者数	31人(男性21人、女性10人)	564人(男性284人、女性269人、性別不明11人)	1,122人(男性627人、女性484人、性別不明11人)
他所出身者	信州(禅定門1人)	江戸(禅定門2人) 房州(居士1人)	江戸(童子1人、信士1人、信女1人) 都内十日市(禅定門1人) 甲州(如蔵1人) 奥州山形郡(禅定門1人)

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	1,002人(男性515人、女性478人、性別不明9人)	897人(男性470人、女性419人、性別不明8人)	1,135人(男性575人、女性491人、性別不明69人)
他所出身者	江戸(大姉1人) 相州(侍者1人) 信州高島郡(信士1人) 信州上ノ諏訪(信士1人	水戸下町(禅定門1人) 信州諏訪(禅定門1人) 都内(禅定門1人) 横川村(信士1人) 八王子(大姉1人)	東京(禅定門1人、信士1人、信女1人、童女1人) 埼玉県高麗郡(童女1人) 群馬県緑ノ郡(童子1人) 相州大住郡(信女1人) 静岡県伊東(禅定門1人) 甲州北郡(禅定門1人) 伊勢国鈴鹿(沙門1人) その他(勤仕男1人)

表5　武蔵国多摩郡打越村E寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	432人(男性217人、女性213人、性別不明2人)	476人(男性270人、女性204人、性別不明2人)	590人(男性297人、女性290人、性別不明3人)
他所出身者	江戸(童子1人)	越後国(庵主1人) 下野国烏山領(禅士1人)	東京(信士1人、信女1人、大姉1人) 越中国新川郡(比丘尼1人) 静岡県長上郡(信士1人) 埼玉県(産元1人) 福生管村(信士1人)

表6　武蔵国多摩郡羽村F寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	539人(男性269人、女性268人、性別不明2人)	430人(男性206人、女性224人)	669人(男性327人、女性342人)
他所出身者	江戸(上座1人)	江戸(童女1人) 越後国刈羽郡(禅童尼1人) 福生村(信士1人)	東京(禅定尼1人) 八王子(信女1人) 滋賀県蒲生郡(童子1人) 近江国(襁女1人) 埼玉県北足立郡(禅定門1人) 福島県安積郡(禅定門1人) 相模国綾陶郡(信士1人) 千葉県(童女1人、童子1人) 西多摩郡(禅定門1人、童子1人、孩女1人) 越後国(禅定尼1人) 愛知県(童女1人) その他(禅定門1人、童子1人、上座1人、童女2人、襁女1人、孩女1人)

表7　武蔵国多摩郡羽村H寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	697人(男性363人、女性333人、性別不明1人)	749人(男性387人、女性362人)	1,102人(男性606人、女性495人、性別不明1人)
他所出身者			相州戸塚(童女1人) 武州北豊嶋郡(禅定門1人) 千葉県上総国長南宿(信女1人) 登戸(信女1人) 信濃国東筑摩郡(信士1人) 相州小田原(禅定門1人、童子1人) 木下村(信女1人)

表8　武蔵国多摩郡千ヶ瀬村D寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1760-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	2人(男性2人)	896人(男性435人、女性459人、性別不明2人)	1270人(男性656人、女性612人、性別不明2人)
他所出身者		近江国(信士1人) 丹波国(上座1人) 越後国(禅定門2人)	東京(童子2人、童女1人、禅定尼1人) 甲斐国都留郡(童子1人) 山口県(居士1人) 武蔵国(禅定門1人) 神奈川県橘樹郡(大姉1人) 相模国津久井郡(居士1人) 秩父大宮(童子1人) 川井村(禅定門1人)

表9　武蔵国多摩郡横沢村K寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1610-1659	1660-1709	1710-1759
被葬者数	312人(男性205人、女性106人、性別不明1人)	475人(男性277人、女性198人)	667人(男性371人、女性294人、性別不明2人)
他所出身者	武州府中(禅定門1人) 高尾(僧都1人、法師1人) 熊川(法師1人) 甲州(禅定尼1人)	檜原神戸(法印1人) 小机村(阿闍梨1人、和尚1人) 伊勢国(信男1人) 遠江国(信士1人) 三河国(信士1人、信女1人) 甲州(信士1人、信女1人) 大和国(信士1人、信女1人) 近江国(法師1人) 尾崎村(法印1人) 下川口釜沢(阿闍梨1人) 川越(法印1人) その他(法印2人、信女1人)	江戸(信士1人、法印1人) 安芸国(信士1人) 武蔵国(法印1人) 越前国(阿闍梨1人) 出雲国(信士1人) 甲州(法師1人) 下野国佐野(阿闍梨1人) 五日市(信士1人、大姉1人) 川越(法印1人) 小机村(信士1人) 高尾(法師1人、法印2人) その他(菩男1人、童子1人、阿闍梨4人、信士3人、法印6人、法師1人、信女6人)

死亡年(西暦)	1760-1804
被葬者数	564人(男性302人、女性261人、性別不明1人)
他所出身者	両国(沙弥1人) 阿波国(居士1人、信士2人、信女1人) 近江国(信士1人) 檜原(信女1人、大姉1人) 雨間村(居士1人) 坂本村(信士1人) 中神村(信士1人) 幣原(信士1人) 旧冬(童女1人)

表10　武蔵国多摩郡五日市村C寺「過去帳」に記録されている被葬者の出身地

死亡年(西暦)	1786-1809	1810-1859	1860-1909
被葬者数	340人(男性161人、女性179人)	496人(男性260人、女性236人)	645人(男性343人、女性302人)
他所出身者	江戸(居士1人、童子1人、信女1人、大姉1人) 八王子(信士1人)	江戸(信士1人、居士3人、童子1人、信女1人、大姉1人) 駿河国藤枝在(信女1人) 信濃国塩科郡(信士1人) 常陸国(信士1人) 近江国(信士1人)	東京(居士1人) 下総国(信士1人) 紀伊国(禅者1人) 相模国小田原(禅定門1人) 千ヶ瀬村(童子1人) 青梅町(居士1人、童女1人)

死亡年月日が記録されている被葬者数，死亡年月日が記録されている被葬者の構成比，死亡年齢が記録されている被葬者数，死亡年齢が記録されている被葬者の構成比．

「過去帳」分析プログラムは，人口学的指標選択画面，データ検索画面，およびデータのdownload 画面から構成されている．利用者側コンピュータに指標を表示するには，Microsoft Excel のグラフ作成用マクロファイルとデータファイルの両者をダウンロードする必要がある．

5. 他所出身被葬者の出身地

5. 1. 出身地の分布

「過去帳」データベースに登録されている多摩郡下10ヵ寺の寺院「過去帳」のうち9ヵ寺の史料には，檀家ではなかったとみられる他所出身の死亡者が供養されている．他所出身被葬者が記録されていないのは，川崎村 A 寺「過去帳」だけである．

多摩郡に立地する寺院「過去帳」に供養されている被葬者の出身地は，寺院周辺の集落にとどまらず，江戸／東京をはじめ，陸奥国，下野国，上野国，常陸国，上総国，下総国，相模国，安房国，甲斐国，相模国，伊豆国，遠江国，駿河国，三河国，伊勢国，信濃国，越後国，越中国，近江国，大和国，紀伊国，丹波国，阿波国，出雲国，安芸国，長門国，豊後国と広範囲にわたっている．

50 年ごとに整理すると，他所出身被葬者は被葬者総数の 0～5.5%を占めている（表 2～表10）．表 4 や表 9 などから確認できるように，他所出身被葬者は 17 世紀初頭から 20 世紀初頭まで継続してみとめられる．

1860 年以降，下石原宿 B 寺，千ヵ瀬村 D 寺，打越村 E 寺，羽村 F 寺，日野宿 G 寺，および羽村 H 寺の 6 ヵ寺で被葬者総数に占める他所出身者の割合が増加している．羽村 H 寺と福嶋村 I 寺を除く 7 ヵ寺では，江戸／東京出身の被葬者がみられ，下石原宿 B 寺や日野宿 G 寺では顕著な増加が確認できる．他所出身の医師（福嶋村 I 寺）や学校教師（羽村 H 寺）などの存在が寺院「過去帳」から確認できるようになるのもこの時期である．19 世紀中期以降における他所出身被葬者の増加が多摩郡に共通する地域的傾向であった可能性については，今後引き続き検討する必要があろう．

5. 2. 戒名の位号

他所出身被葬者に付けられた戒名の位号は，孩女，孩亡，嬰女，童子，童女，禅童尼，禅定門，禅門，禅定尼，禅尼，勤仕男，善男，信士，信男，信女，居士，大姉，禅者，禅士，上座，知蔵，侍者，沙門，沙彌，比丘尼，庵主，法師，法印，和尚，座元，阿闍梨，僧都と多岐にわたっている（表 11）．

戒名の位号や俗名などから判断できる他所出身被葬者の性別は，男性 144 人，女性 66 人である．他方，戒名の位号から判断できる他所出身被葬者の年齢階層は，数え年 15 歳未満とみられる子供が 41 人，成人が 131 人，俗人を除いた出家などが 38 人である．女性や子供のなかにも，在所から離れた多摩郡の寺院「過去帳」に記録・供養された者が相当数にのぼることはとくに注目される．

表11 他所出身被葬者の戒名の位号

戒名の位号	孩女	孩亡	嬰女	童子	童女、禅童尼	禅定門、禅門	禅定尼、禅尼	信士、信男、善男、勤仕男	信女
下石原宿B寺(1760-1909)	1	1	0	3	2	4	2	3	4
福嶋村I寺(1760-1909)	0	0	0	1	0	0	1	1	1
日野宿G寺(1610-1909)	0	0	0	2	2	10	1	6	3
打越村E寺(1760-1909)	0	0	0	1	0	0	0	3	1
羽村F寺(1760-1909)	2	0	2	4	7	4	2	2	1
羽村H寺(1760-1909)	0	0	0	1	1	2	0	1	3
千ケ瀬D寺(1810-1909)	0	0	0	4	1	4	1	1	0
横沢村K寺(1610-1804)	0	0	0	1	1	1	1	20	12
五日市村C寺(1760-1909)	0	0	0	3	1	1	0	6	3
合　　計	3	1	2	20	15	26	8	43	28

戒名の位号	居士	大姉	禅者、禅士	上座	比丘尼	和尚など
下石原宿B寺(1760-1909)	1	0	0	0	0	0
福嶋村I寺(1760-1909)	0	1	0	0	0	0
日野宿G寺(1610-1909)	1	2	0	0	0	3
打越村E寺(1760-1909)	0	1	1	0	1	2
羽村F寺(1760-1909)	0	0	0	2	0	0
羽村H寺(1760-1909)	0	0	0	0	0	0
千ケ瀬D寺(1810-1909)	2	1	0	1	0	0
横沢村K寺(1610-1804)	2	2	0	0	0	32
五日市村C寺(1760-1909)	6	2	1	0	0	0
合　　計	12	9	2	3	1	37

居士や大姉といった戒名の位号を持つ者も21人確認できる．他所出身被葬者のなかには，居士や大姉といった戒名の位号をつけるに相応しいとみなされた者も含まれていた．

5. 3. 死亡年齢

出身地が記録されている被葬者214人の約29%に相当する62人については，死亡年齢が記録されている．このうち数え年9歳以下の乳幼児が22人で35%を占め，死亡年齢が記録されている他所出身被葬者のなかでは卓越している（表12）．22人の多くは，借家に住む他所出身寄留者の子供である．

5. 4. 死亡月

表13によれば，他所出身被葬者の死亡月（新暦）は分散しており，遺体の腐敗の進行が速い夏季の他所出身被葬者数が他の月と比較してとくに少ないわけではない．5月，6月，10月に死亡した他所出身被葬者は20人を超える．逆に，11月に死亡した他所出身被葬者数は7人にとどまっている．

6. 他所出身被葬者の葬送事例

他所出身被葬者は，どのような状況下で出身地から離れた多摩郡の寺院「過去帳」に記録されたのであろうか．寺院「過去帳」から他所出身被葬者が死亡した状況を復原することはできない．本章では，19世紀の多摩郡で生活していた民衆が著した日記を検討することにより，他所出身被葬者の具体像に接近を図りたい．

次に示す史料Aは多摩郡中藤村で縊死した者の遺骸を首縊人の在所である練馬から引き取りに来た事例，史料Bは多摩郡柴崎村で厄介になっていた老婆の遺骸を出身地の郷地村に引き渡した事例である．

史料A（武蔵村山市教育委員会『指田日記（多摩郡中藤村）』1994，p.368）

元治元年九月廿七日　十王堂死馬捨場ノ南馬繰ひ場ニテ，練馬ノ者縊首死ス．

同廿八日　十王堂前首縊人，練馬ヨリ来リ引取．

史料B（立川市教育委員会『鈴木平九郎　公私日記　第七冊（多摩郡柴崎村）』1976，p.68）

天保十四年八月廿一日　隣民五郎方厄介之老婆死去ニ付今夜郷地江引渡之由也．

いずれの事例も，前稿で指摘したように，他所で死亡した者の遺骸を在所に引き取り，葬式を行うのが原則であったことを裏付けている．

史料Cは，史料Bと同様，死亡者の出身地が判明していても，在所に遺骸が引き取られない場合には，死亡地周辺で葬儀が行われていたことを示している．

史料C（日野市教育委員会『河野清助日記　三（多摩郡日野宿）』2001，p.65）

表12　他所出身被葬者の死亡年齢（数え年）

死亡年齢（歳）	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89
下石原宿B寺(1760-1909)	3	0	0	1	1	0	0	1	0
福嶋村I寺(1760-1909)	0	0	1	0	0	0	0	0	0
日野宿G寺(1610-1909)	1	0	1	2	0	0	0	1	0
打越村E寺(1760-1909)	0	0	1	0	0	0	0	0	0
羽村F寺(1760-1909)	11	0	1	0	2	1	0	0	0
羽村H寺(1760-1909)	1	0	0	0	1	1	0	1	0
千ヶ瀬村D寺(1810-1909)	5	0	1	1	1	0	0	0	1
横沢村K寺(1610-1804)	1	1	2	2	3	3	3	3	3
五日市村C寺(1760-1909)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	22	1	7	6	8	5	3	6	4

表13　他所出身被葬者者の死亡月（新暦）

死亡月（新暦）	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
下石原宿B寺(1760-1909)	3	3	1	2	4	0	1	0	1	3	1	1
福嶋村I寺(1760-1909)	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	1	0
日野宿G寺(1610-1909)	6	1	4	3	1	2	1	3	3	2	2	2
打越村E寺(1760-1909)	0	1	2	1	1	2	1	0	0	1	0	1
羽村F寺(1760-1909)	0	2	0	1	2	5	2	6	3	4	0	2
羽村H寺(1760-1909)	0	0	2	0	2	1	0	1	0	1	0	1
千ヶ瀬村D寺(1810-1909)	0	1	0	2	0	0	1	2	1	3	1	4
横沢村K寺(1610-1804)	6	6	7	5	6	11	7	4	7	9	1	7
五日市村C寺(1760-1909)	1	3	3	1	4	0	2	1	3	3	1	1
合計	16	17	19	18	20	21	15	18	18	26	7	19

明治八年七月二十六日　栗山亦吉前日十二時ニ病死，トムラヒニ立会，相州厚木在舟子村産ナリ，六十三才ニテ畢ル．

相模国愛甲郡舟子村出身の栗山亦吉が死亡したため，亦吉が寄留していた日野宿の周辺で葬儀が執り行われたことを推測させる．

次にあげる史料 D は，遠隔地出身の死者を死亡地の寺院が埋葬した経緯を具体的に示している点で貴重である．

史料 D（五日市町郷土館『大悲願寺日記　下（多摩郡横沢村）』1994，p.211-212）

文化十一年三月十一日　伊奈村成就院旦方彦右衛門・孫兵衛・喜右衛門右三人罷出て，成就院に差置き候秀本義，病気に付き引受人光明院方へ引渡し候えども，此の節病死候所，光明院願ニて，出生村へ差送り候義，遠方ニて甚だ難渋仕り候間，成就院墓所かしくれ候よう旦家へ相頼み候間，右成就院墓所へ御葬り下され度き段願来り候間，右発心者に候えば，往来これあるべきや相糺し候所，これなき由これを申し候間，左候えば，光明院并ニ旦家加印ニて一札差出し候よう申聞かせ候所，承知の趣ニて書付差出し候間，成就院墓所へ相葬り遣わし候趣相答え申し候．尤も引導ニハ大光寺遣わし候．

大悲願寺の末寺である成就院にいた秀本は，病気になったため光明院に引き取られ死亡した．光明院は，秀本の出生した村が遠方で遺骸を送るのが困難であるため，故人に縁のあった成就院の墓所を借りて埋葬したいと願い出た．大悲願寺住職は，秀本が往来手形を所持していないことを確認した後，光明院と成就院の檀家から一札取り，末寺である大光寺住職を引導として秀本の葬儀を行っている．

この史料は，他所出身者が死亡すると出生地に遺骸を送るのが原則であったことを裏付けている．出生地が遠隔地にあって，遺骸の搬送が困難な場合には，死亡地周辺の寺院で葬儀が行われた．埋葬の際，往来手形の所持が確認されている点にも注目したい．

史料 E（立川市教育委員会『鈴木平九郎　公私日記　第二冊（多摩郡柴崎村）』1973，p.26）

天保九年三月十六日　今日美濃国之もの八才ニ相成候男子壱人召連，江戸より帰国之途中日野宿ニ而急ニ発病，死去ニ付御検使相願候よし也．

史料 E は，江戸から美濃国に帰国する途中，旅人の 8 歳になる男子が日野宿で病死した事例である．検使を受けた後，図 1（イ）祖梅童子のように宿場町周辺の寺院に埋葬された可能性も高い．甲州街道，青梅街道，五日市街道などの沿道に立地する寺院では，史料 E のような遠隔地から来た旅人を埋葬することも稀ではなかったとみられる．

7. おわりに

本プロジェクトでは，1850 年代から牛痘種痘法の導入が始まった武蔵国多摩郡における天然痘による子供の死亡数が 1860 年代から激減したという作業仮説を検証するため，寺院「過去帳」を史料として，多摩郡の在所で死亡した子供数の時系列的変化の復原を目指している．

本稿では，寺院「過去帳」から死亡に関わる人口学的指標を算出する研究過程を自動化するために「過去帳」分析システムを構築し，システムを活用して武蔵国多摩郡に立地する 10 ヵ寺の寺院「過去帳」に記録されている被葬者の出身地について検討した．

検討の結果，多摩郡の寺院「過去帳」に記録されている被葬者の出身地は，17 世紀初頭から東北，関東，東海，北陸，近畿，四国，中国，九州地方にわたっていることが確認された．他所出身被葬者の戒名の位号，性別，死亡年齢，死亡月は分散している．19 世紀の民衆が著した日記によれば，他所出身の死亡者の遺骸は，在所に運ばれて葬式をあげるのが原則であったとみられる．しかし，在所が遠隔地である場合など事情によっては，死亡地周辺の寺院に埋葬されることも稀ではなかった．

1860 年以降，多摩郡の寺院で供養される他所出身被葬者は増加傾向にあった可能性があり，江戸／東京出身の被葬者が共通に確認できるようになった．寺院「過去帳」から復原することのできる被葬者の出身地は，江戸／東京を中心とする大都市近郊村落における生活交渉空間の実態を示唆している．

今後の課題として，以下の点が残されている．

①「過去帳」データベースの規模拡大．
②「過去帳」分析プログラムの充実．
③日記などによる他所出身死亡者の実態解明．
④他所死亡者をめぐる法規の検討．

謝辞

本研究には，2006～2008 年度・科学研究費補助金・基盤研究 C（課題番号：185000198，研究課題：近代移行期における親族関係分析システ

ムの構築，研究代表者：川口　洋），2006・2007 年度・日本私学振興共済事業団・学術研究振興資金（研究課題：「幕末維新期人口史料」分析システムの構築，研究代表者：川口　洋），および 2006・2007 年度・帝塚山大学・特別研究費の補助を受けた．貴重な史料の閲覧を快諾された寺院には，改めて深謝申し上げたい．

参考文献

[1] 川口洋：牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡による疾病災害，歴史地理学，Vol.43, No.1, 2001, pp.47-64.

[2] Kawaguchi Hiroshi: From the faith cure activities to the vaccination, the first step to the decrease of the child deaths in the 19th century, Japan, paper prepared for the Sixth European Social Science History Conference in Amsterdam, the Netherlands, 2006.

[3]たとえば，伊藤繁「戦間期の日本人口」（日本人口学会編『人口大辞典』培風館，2002, p.109）に代表的な見解が示されている．

[4] 川口洋・上原邦彦・日置慎治：寺院「過去帳」データベースの構築，情報処理学会：人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，pp.59-66, 2004.

[5] 川口洋『平成 15～17 年度　科学研究費（基盤研究　C）研究成果報告書　寺院「過去帳」分析システムの構築』2006，帝塚山大学経営情報学部川口研究室，190 頁．

[6] 川口洋・上原邦彦・日置慎治：「過去帳」分析システムを用いた史料吟味，情報処理学会：人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，pp.101-108, 2006.

[7] 川口洋・上原邦彦・日置慎治：「過去帳」分析システムの構築と活用　- 大都市近郊農村における民衆の死亡地 -，情報処理学会研究報告，Vol.2007, No.95, pp.49-56, 2007.

[8]中山文人：本土寺過去帳をめぐる諸問題（地方史研究協議会編『地方史・研究と方法の最前線』雄山閣）pp.57-76,1997．などが「過去帳」に関する資料批判の水準を指摘している．

[9] 五島敏芳：五郎兵衛新田村行路病死人関係史料，水と村の歴史，No.8, pp.65-151, 1993.

[10] 五島敏芳：往来手形考，史料館研究紀要，No.28, pp.157-195, 1998.

[11] 松本純子：行き倒れ人と他所者の看病・埋葬　－奥州郡山における行き倒れ人の実態－，東北文化研究室紀要，No.42, pp.53-82, 2001.

[12] 松本純子：近世における行き倒れの一分析，日本歴史，No.651, pp.55-72, 2002.

[13]高橋敏『家族と子供の江戸時代』朝日新聞社，1997.